

## 国際ワークショップ「日仏ナレッジ・マネジメント対話と新たな展開」に参加して

株式会社キトー 経営管理本部 部長 佐脇英志

リヨン第1大学 ダヴィッド・ヴァラット准教授と共同研究者であるリヨン第1大学のサンドラ・ベルティン氏のセッションに参加する機会を頂きました。ただ、折角の機会にも拘らず当日直前の会議が長引き、セッションの半分しか参加できませんでした。従って、本稿は部分的な考察になってしまいますが、少しでも参考になればと考えます。

本セッションにおいて私の最大の関心事は、2人の研究者が使っているリサーチメサドロジー（調査研究方法論）です。アクションリサーチという方法論で、研究者が実際に現場に入って変革行動を起こしてその Reflection(内省)によってファインディング（気づき・発見）を得るというチャレンジングな方法論です。インターネットによれば、「アクションリサーチとは変革の研究であり、その研究者は変革の実践者でもある」とのことです。従って、非常に効果的な方法論ですが、一方で倫理性と信頼性の担保が難しい方法論です。従って、特に経営学の分野では日本ではなかなか使いこなす人がなく、私自身文献でお目にかかるだけで、実際に使っている人にお会いしたことはありませんでした。2人の研究者は、学習方法論に関して200人の生徒に対してアクションリサーチを行っており、加えて去年からヘルスケア組織の15人の役員に対してアクションリサーチを行っているとのこと。徐々に研究の成果が出始めているということで、次回お会いして進捗を教えてくださいたいのが楽しみです。

その後のフリーディスカッションでは、ダヴィッド・ヴァラット准教授が、「日本人は良く働くのに対しフランス人は働かない」という話をしました。「日本人が働いたのはバブル前であり、最近の若者は働かない」と私が話し、その理由を聞かれたところ「裕福な環境の中、競争意欲が働かず、無力感が広がっている」と答えました。実は、ヴァラット准教授によれば、この現象はフランスでも同じとのこと。若者の無力感は共通の課題で、KM(ナレッジ・マネジメント)によってモチベーションアップしていくことが肝要ということになりました。

確かに、若者の無力感は世界的な問題となり、実は欧州ではこのような若者の不満が、テロやテロ組織への関与に広がっているとのこと。

KM というコンセプトを、異なったバックグラウンドを持つ海外の人達と議論するこのセッションは、色々な知識をシェアでき、いくつかの新しい発見に出会える素晴らしい機会と考えます。KMのフレームワークの実践の一環として、是非このようなグローバルセッションの機会を増やし、続けていくべきであると考えます。